世界文学全集 40

モーム

月と六ペンス

雨　赤毛　手紙　他

阿部知二 中野好夫 訳

河出書房

世界文学全集 40 サマセット・モーム

© 1969

編集委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和36年4月25日　初版発行
昭和44年11月20日　26版発行

定価 430円

訳　　者　阿部知二
　　中野好夫
発 行 者　中島隆之
印 刷 者　佐藤　勇
装　　幀　原　弘

印　　刷・有限会社亘明舎印刷所
製　　本・株式会社若林製本工場

発 行 所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座東京 10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

0397-310140-0961

目　次

月と六ペンス……一
短　編
雨……二三
赤　毛……二五八
手　紙……二八一
園遊会まで……三一〇
奥地駐屯所……三五一
年　譜……三八七
解　説……（朱牟田夏雄）三九七

月と六ペンス

阿部知二訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

主要人物

チャールズ・ストリクランド　ロンドンの株式仲買人として、妻子とともに富裕な生活をしていたが、四十歳のころ、突然失踪しパリで極貧の生活とたたかいながら、憑かれたように絵を書きつづけ、流浪のすえ、タヒチ島に渡り、生涯を終わる。世界的巨匠ポール・ゴーギャンをモデルとしている。

エミ・ストリクランド　チャールズの妻、社交的夫人。

ロバート・ストリクランド　チャールズの息子。

フレッド・マクアンドルウ　イギリス陸軍大佐。エミの義兄。

ドロシイ・マクアンドルウ　フレッドの妻。エミの姉。

ディルク・ストルーフェ　オランダ人。画家。絵は下手だが、天才を発見する鑑賞眼はするどい。道化じみるほどお人好しで、ストリクランドにさんざん嘲弄され、最後に最愛の妻まで奪われる。

ブランシュ・ストルーフェ　ディルクの妻。夫を捨ててストリクランドのもとへ走るが、三か月で捨てられ、自殺する。

序

この小説はポール・ゴーギャンの生涯に暗示をうけたものである。ある時期、数年ロンドンに住んでいた私は、勤勉に仕事しながらも収入はきわめてすくなかったが、その生活をたのしんでいた。四、五編の小説を書き、そのうち二つは失敗ではなかった。一般社会では無名だったが、あちこちにちらほら、私が有望だとみとめてくれる人はあった。才能ある若者を食卓にまねくことを好む富裕な年配婦人からは大事にされたし、老紳士たちも大そう親切で、彼らのクラブの食事にさそってくれた。私はしじゅうごちそうにあずかり、またしばしば田園での愉快な週末をすごした。文学的なお茶の会にも出た。多くの貴族夫人たちの舞踏会の招待のリストの中にもはいっていた。私は、とぼしい収入ながらに、一応の体面はつくろっていた。私の処女戯曲は「演劇協会」によって上演され、「フォートナイトリ・レビュー」に掲載されるという大きな名誉をもった。ちょうど三十歳だった。重大な時機にさしかかったと思われ、私は、何か断固たる一歩をふみ出すべき要請を内に感じた。

私はいたたまれなくなった。自分の平穏で狂いのない生活に腹立たしくなった。週末は富んだ人々の邸を訪問し、その間にはメイフェアの果てしもない盛大な饗宴にまねかれることに、あきあきとした。もはや舞踏会には行く心がしなくなった。年をとってきつつあり（と、私は思った）、貴重な歳月が、自分の指のあいだから空しくこぼれおちつつあった。私には人生へのやみがたい渇望があった。私をすりへらしつつある快適な人たちや単調な享楽から、絶縁してうごきだそうと決意した。ヴィクトリア駅近くの、一時はひどく誇りに思っていた小さなフラットを出、家具を売りはらい、パリに向かった。それは無謀の挙ではなかった、と私はいまも思っている。というのは、それは一九〇四年のことであり、まだそのころのパリは文化の母胎と思われたからである。そ

こに画かきの友人が住んでおり、彼がかたるカルティエ・ラタンの生活は、よく私の好みに合致した。私は、ただ魂にだけでなく、冒険を期待した。私はパリに生まれ、子どものころから知っており、それから両親の死によってイギリスに帰ってから後も、旅のゆききの時などに、あるいは長く、あるいは短く、滞在した。しかし私が知っていたパリは、シャン・ゼリゼとブールヴァール目抜き通りとのパリだった。モンパルナスのパリは私には珍しかった。私はベルフォール獅子像に近い、アパートメントの五階の、ひろびろと墓地が見わたせる三間をかりた。当時のモンパルナスは、ほとんど地方都市という感じをもっていた——もっともいまでも、想像ゆたかな目をもって眺めるならば、まだその感じを、うれしくもちつづけているのだが。とにかく、その後に貫通することになった美しい大街路は、まだ存在しておらず、ラスパイユ街もまだ建設半ばであった。ランヌ通りには鉄道馬車が走っていた。その後に、パリの半ばを——外人も土地っ子もともどもに惹きつけることになった夜の生活は、まだ夢にも知られなかった。ドウム、ロトンド、リラの園などの料亭はあったが、その客は付近のものたちだった。三頭の馬のひく乗合いで、河をわたって対岸にゆくのは、遠出だった。それは、ルーヴル博物館か美術展か、それとも時おりの劇場ゆきのほかには、ほとんどなされなかった。通例、芝居が見たければ、モンパルナスのゲーテ座へ行った。ランヌ通りには、何軒かりっぱな店があったが、横丁にはいれば、一世紀も前そのままの、ちいさな、くさくむさ苦しい店がならんでいた。モンパルナスの生活は強烈だった。というのは、芸術が世界でもっとも重大なものとされ、それから、みなが若かったので、恋——といっても、たいていは淡くてあとくされのないものが、さらに熱気を加えていた。しかも、それはそれとして、暮らしはしずかで簡素で気楽だった。また、信じられぬほど安かった。どのように忙しくても、ゆったりとした閑暇があった。空気は繁華街のパリよりも澄んでいる感じであり、人々ものんびりとしていた。振りかえってみるとき、もっともあざやかに想起されるのは、胸中に、日光におどる微塵のようにおどった、何ものかへの予期の感だった。私がセザンヌとファン・ゴッホとゴーギャンとの存在を知ったのは、そのころだった。このうち、私が思うのでは、セザンヌがはる

かにすぐれているが、ゴーギャンは、文学者を惹きつける特異性をもっている。今日私は、彼の画にさほど感嘆するのではないが、なお、そこには文学的想像心に訴えるものがじつに多いことを感ずる。彼と知りポン・タヴァンで制作生活をともにしたという連中と、私はつき合った。彼について多くのことを聞いた。ふと私は、それらの話のうちに小説の主題があると思い、そして、当時存在した唯一の評伝書を読んだ。私は想を心の中にいだきつづけた。十年以上もいだきつづけた。私がタヒチ島に行ったのも、何かゴーギャンの生活について発見できるだろう、という心からだったのだが、そこでもまた、彼と深く、あるいは浅く交渉をもった人々に出会った。ついに、じつに長く心のなかであたためていた小説を書く機が熟したことを知った。それは、一九一八年の夏、大戦初期にかかった結核の回復期をサリの丘陵地でおくりつつあったときに、それは書かれた。

チャールズ・ストリクランドのマルセイユでの経験については、私は、ハリ・フランクの『世界放浪記』という興味深い旅行記の一部を使った。小説において、その知識の出どころになったものを書きしめすなどというのはばかげており、読者がつくりあげようと欲する幻影をこわしてしまうことになるのだが、しかし私は、その問題の個所の語り手であるニコルズ船長が、それを何かの雑誌で読んだらしいとほのめかすことによって、読者に真実の一端を暗示したのであった。しかも、それでは充分でないというわけらしく、ある紳士は憤慨して、私の不都合な行為を糾弾する長い文章を書いた。そのおかげで、私の心は安まった。私は心からハリ・フランク氏への恩義をみとめるものである。『世界放浪記』は、読んでたいへんおもしろい。その十余の挿話は、想像力と人間洞察力と筆力と、そして物語をつくり出そうとする創造意欲となくしては書きえないものである。小説家は全知の人ではない。彼に必要な多くの知識を、他の人または書物から得るということは避けられない。作者は、彼が書くすべてを、おのれの頭の中で発明したような顔をしなければならぬというのは、きわめて近年に発生した観念である。昔の作者たちは、ほしいものは、たがいに取り合った。それどころか、恥ずかしげもなく、その個所全体を引き写しにした。これは、今日のように、本を書くことが商業的企画である時代には、とがむべきであ

ろうが、ただある作家が、他人の書物の中に発見した一挿話を使用したからといって騒ぎ立てるのは、ばかげている。それを有効に活用することによって、彼は充分に自己のものとしたのである。事実を記録した書は、想像力によって創作するもののための、公然の採石場である。それらを使用してならないという理由が成立しないことは、クラブの喫煙室やホテルの酒場で聞いた事実談におけると同様である。私は、さらに進めたい。すべての作家は、役立つものならば、たがいに取り合ってさしつかえない、といいたい。いく度か舞台で、私の戯曲から失敬した場面を見たが、私は髪の毛一本うごかさなかった。同業劇作家たちが、かくも丹念に私の作品を勉強しなければならなかったということに、得意を感じた。近年、ある若い人が「マルセイユで食いつめ」という一文を草したことがある。その新聞社は、それが『月と六ペンス』からの逐語的な写しであったことを発見して、大いに頭をなやました。それは、私自身がハリ・フランク氏の本から使用した個所ばかりでなく、往年のマルセイユの、さらに柄の悪い場所での（今日、残念にも、不況のため、そのめまぐるしい活気をうしなっている）私自身の見聞によって書かれた部分をも、写していたのだ。私は編集者の心配をなだめ（彼は、必ずや私が版権侵害の告訴をするものと決めていた）、どうかあの一文の筆者の文才を賞賛されるようにと希望した。

一九三三年　　サマセット・モーム

一

告白するが、はじめてチャールズ・ストリクランドと知り合ったとき、彼に人と変わったところがあるとは、私には夢にも考えられなかった。しかし今日では、彼の偉大さを否定するものは、まずないであろう。私は、幸運な政治家とか、成功した軍人とかがかち得た偉大さについていっているのではない。それは、人間そのものよりは、彼の占める地位に付帯している特質なのであって、情勢が一変すると、まことにささやかなものになってしまうのだ。あまりにもしばしばあることだが、総理大臣の古手は、言葉だけものものしい雄弁家にすぎなくなり、軍隊を持たぬ将軍は、田舎町の凡々たる人気ものにすぎなくなる。チャールズ・ストリクランドの偉大さは、本物だった。彼の芸術が気に入らない人であっても、どうしても、それに対して関心を払わずにはいられないだろう。彼は、私たちの心をかき乱し、そしてとらえてしまう。彼が嘲笑の対象であった時はもはやすぎてしまい、いまはもはや、彼を弁護するのは奇矯でなく、激賞するのもあまのじゃくではないのだ。彼のいくつかの欠点は、それなくしては長所もまたなくなるもの、として容認されている。芸術の世界における彼の地位を論議することは、いまなお可能であり、彼の賛美者の追従も、非難者の酷評とともに勝手放題なのだとはいえるが、ただ一つ疑いの余地がないのは、彼が天才だったということである。私にとって、芸術でもっとも興味のあるのは、芸術家の個性なのであって、それが非凡なものであれば、数多くの欠点も、よろこんで許すつもりである。ヴェラスケスは、エル・グレコよりもいい画家だと思うが、月並みさのため、賞賛の気分もそがれてしまう。だが、この官能的で悲劇的なクレタ島人（ヴェラスケス、エル・グレコは、ともに十六―十七世紀のスペインの画家。後者はギリシャのクレタ島出身）は、さながらいけにえのように、その魂の神秘をひらき示している。芸術家は、画家、詩人、音楽家を問わず、荘厳または優美の彫琢によって、審美感を満足させてくれるのだが、しかもそれは、性的本能に近いもので、ともに野蛮性をふくんでいる。しかし芸術家は、さらに偉大な、自己という贈り物を、われわれの前においてくれる。彼の秘密を追求することには、探偵小説の魅力に似た何ものかがある。それは、宇宙と同じく、解答を持たないという、すばら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

しい謎である。ストリクランドの作品の中の、もっともくだらぬものでさえ、ふしぎな、もだえ苦しむ、複雑きわまる個性を暗示している。彼の絵を好きになれぬ人たちでも、それらに無関心ではいられなくなるのは、まさしくこのためなのである。彼の生涯と性格とが、こんなに、異常な興味を人々の心にかき立ててきたのも、これのためなのである。

モリス・ユレが「メルキュール・ド・フランス」（フランスの文芸雑誌）に短評をのせたのは、ストリクランドが死んでからようやく四年目のことだが、それが、この無名の画家を忘却の淵から救いあげ、後につづく評論家たちが、そのユレの心そのままではなかったとしても、だいたい同じようにたどってゆく道を明るく照らしたのだった。長らくフランスでは、あれほど動かしがたい権威を保った批評家はいなかった。だから、彼の主張に影響を受けないということは、不可能だった。その主張は、常識はずれのようにも思われたが、後になっての判断は、彼の評価を確証し、いまではストリクランドの名声は、ユレがえがいた線上に確固としておさまっている。この名声の上がり方は、美術史においてもっともロマンティックな出来事の一つである。しかし私は、チャールズ・ストリクランドの人柄に関する場合をのぞいては、彼の作品を論じようとは申しあげない。ただし、門外漢には絵なんかわかりはしないし、絵の鑑賞眼をいちばんよく示すには、黙って小切手帳を出せばいいのだ、などと人もなげにいう画家たちには、私は賛成できない。それは芸術の中に、ただその専門家にしか完全には理解できない技巧のみを見ようという、ばかばかしい思いちがいである。芸術というものは、情緒の表現であり、情緒は、万人が理解できるはずの言葉をかたるものなのだ。けれども私は、技巧について実際的な知識を持たぬ批評家は、作品の真価という問題には、何もいうことはできないということを認めるのであり、そして私が絵について無知なことは、極端である。幸いにも、私はそのような冒険をしなくてもいい。というのは、私の友人で、りっぱな画家であると同時に、するどい評論家でもあるエドウォード・レガット氏が、その小冊の書*で、あますところなく論じている。この書は、イギリスでは不幸にも大体においてフランスでほど開拓されなかったスタイルの作品の趣味ふかい一例である。

*エドウォード・レガット（王立アイルランド美術院准会員）著『ある現代の芸術家――チャールズ・ストリクランドの作品に関する覚え書』マーティン・セッカ出版、一九一七年。

モリス・ユレは、その有名な小論において、チャールズ・ストリクランドの生涯の概略をのべているが、それは、もの好きな人々の意欲を刺激する力を充分にそなえ

ている。もちろん公正な芸術愛の精神からして、彼は、最高度に独創的な一個の才能に対して世の識者の注意を向けさせようという、心からなる願望にかられたのである。しかし、あまりにもすぐれたジャーナリストであった彼は、「人間的な興味」のほうが、よりたやすくその目的を果たしうることに気がつかぬわけはなかった。そこで、過去にストリクランドと交渉のあった人たち、つまりロンドンで彼と知り合いになった作家たちとか、モンマルトルのキャフェで彼に会った画家たちとかは、あれもまた一人のうらぶれた画家にすぎないのだと思っていたのに、自分たちが、本物の天才と肩を突き合わせていたことを発見して、びっくりしたのであり、そして、どうどうたるストリクランドさわぎがまきおこり、人々の好奇心を満たしてしずめるどころか、かえってかき立てるような文章が、あるいはだれかの回想、あるいはだれかの鑑賞論というふうに、続々と、フランスやアメリカの雑誌にあらわれはじめた。これはまさに好餌というべきもので、かの勤勉なヴァイトブレヒト・ロートホルツ*のごときは、その物々しい研究論文において、おどろくばかりの出典をならべ立てるにいたったのである。

*ヒューゴ・ヴァイトブレヒト・ロートホルツ（文学博士）著『カルル・ストリクランド――その生涯と芸術』シヴィンゲル＝ハニッシ出版。ライプチッヒ、一九一四年。

人類は、神話を作る能力を生みつけられている。およそ世の人々とは異なった人物の経歴に、何かおどろくべき、あるいは謎めいた出来事でもあると、この能力は、それに貪らんにつかみかかり、伝説をつくりあげ、そして狂熱的な信仰を付加するのである。それは、平々凡々たる人生に対する、ロマンスの抵抗なのである。伝説上のいろいろな出来事は、その主人公を不朽なものにするための、もっとも確実な旅券である。皮肉な哲学者は、微笑を浮かべながら思うのであるが、サー・ウォルター・ローリイが、人類の記憶の中に安全に残っているのは、未知の国々へ英国の地名をつけに行ったからというよりは、エリザベス女王の歩行のために、彼のマントを敷いたからである。チャールズ・ストリクランドは生きている間は、無名だった。友人よりは、敵を多く作った。だから、彼について書いた人たちが、そのとぼしい思い出を、たくましい空想力で補ったとしても、べつに怪しむには当たらないし、また彼について知られているわずかの事実の中には、ロマンティックな筆者たちが利用するに充分の材料があったということも明白である。彼の生涯には、奇怪で恐るべきことが多いし、その性格には、何かものすごいところがあり、その運命には、悲痛きわまりないところが少なからずあった。時がたつにつれて賢明な歴史家ならば、攻撃するのをためらうほど、微に

入り細をうがった一つの伝説が発生した。

しかし、ロバート・ストリクランド牧師こそは、まさに賢明な歴史家とは反対のものであった。彼が父親の伝記*を書いたのは、父の晩年に関して、「世間に流布されて、現存者にかなりの苦痛を与えている、ある種の誤解を一掃する」ためだというのである。ストリクランドの生涯について、一般に信じられている記述には、上品な家庭の人々を当惑させるようなことが多いことは、隠れもない事実である。私は、からかい気分でこれを読んだのだが、これが精彩がなく、退屈なものであるので、まあよかったと思っている。ストリクランド君は、模範的な夫であり父であり、気だてがやさしい、勤勉な習慣を身につけた、徳性高い人間の像をえがいている。この現代的牧師は、たしか聖書解釈学とかと呼ばれる学問を研修中に、どんなことでも、おどろくほど容易に説明してしまうという術を身につけたらしいのだが、とにかくロバート・ストリクランド師が、孝行息子には、思い出すのは不都合と思われるような、父の生涯のあらゆる事実に、「解釈をつけて」いるその巧妙さから見ると、きっと、時が熟するならば、彼は国教会の最高職につくことになるにちがいない。すでに私には、そのたくましいふくらはぎが、主教のゲートルで包まれているのが見える心地がする、ああいう伝記を書くということは、雄々しいことではあろうが、危険なことでもあった。というのは、ストリクランドの名声が大きくなったのには、一般に信じられている伝説が、少なからずあずかって力があったともいえるからである。なにしろ、彼の芸術に惹きつけられた人々の中には、彼の人柄に対していだいた蔑みの情とか、彼の死に対する憐憫の情とかによるものが多かったのだ。善意の息子の努力は、父の賛美者たちに異様な冷水を浴びせることとなった。彼の傑作の一つ「サマリアの女**」を、ストリクランド君の伝記出版によって引きおこされた論議の直後に、以前の持ち主の急死のため、画商クリスティが売りに出したとき、九か月前にその以前の持ち主である著名な収集家が買ったときよりも、二百三十五ポンドも安い値しかつかなかったのは、決して偶然によるのではない。人間の持つあのおどろくべき、神話創造能力が、異常なるものへの渇望を冷却させてしまうような記述を、がまんできなくなって一掃してくれなかったとすれば、あのチャールズ・ストリクランドの力と独創性とをもってしても、形勢を一変させるには充分ではなかったろう。ただ、たまたまヴァイトブレヒト・ロートホルツ博士が、あの著作を出版して、とうとう、あらゆる美術愛好者の不安懐疑の念を、決定的に癒してくれたのである。

*ロバート・ストリクランド著『子によるストリクランドの

人と作品』ウイリャム・ハイネマン出版、一九一三年。
**クリスティの目録には、つぎのように記載されてある。
「裸体。流れのほとりに横臥するソサイエテ諸島の土人女。背景は、椰子の木、バナナ等の熱帯風景。縦六十インチ——横四十八インチ」

ヴァイトブレヒト・ロートホルツ博士は、人間性というものは、どのようにでも悪くなれるばかりでなく、さらにそれよりもはるかに悪い、と信じている一派に属する歴史家である。だから読者は、こういう人たちの書いたものを読んだほうが、ロマンス中のめざましい人物を、家庭的美徳の典型としてえがくという、意地悪な趣味にふける作家たちのものよりも、おもしろいことはたしかだ。私としては、アントニイとクレオパトラとの間には、経済的関係しかなかったと考えるのは、どうにもやりきれなくなるし、ティベリウス皇帝が、ジョージ五世と同じように、汚れなき君主だったことを私に納得させるためには、ありがたいことには探し出せそうもない、もっとたくさんの証拠が必要となるだろう。ヴァイトブレヒト・ロートホルツ博士は、このような立場から、ロバート・ストリクランド師の無邪気な伝記をこっぴどくやっつけているので、この不幸な牧師にたいして、ある種の同情を寄せずにはいられぬほどである。彼が上品に控え目にしていると、偽善の烙印を押され、しゃべりまくれば、容赦なく嘘だときめつけられるし黙れば、世をあざむくものだと悪罵されたのである。文筆家としては非難さるべきだが、息子としては許されるちょっとした誤ちのため、アングロ・サクスン族全体をひっくるめて、やれ澄まし屋だの、いかさまだの、見栄坊だの、ぺてん師だの狡猾だの、やれ料理が下手だの、と非難を浴びているのだ。私個人の考えでは、ストリクランド君が、ご両親のあいだにある種の「気まずさ」があったと人々を信ずるにいたらしめた物語を反ばくするため、チャールズ・ストリクランドが、パリから書いた手紙で、妻のことを「すばらしい女」と書いていると述べたのは、どうも軽率だったようだ。というのは、ヴァイトブレヒト・ロートホルツ博士は、その手紙を複写して示すことに成功しているのだが、問題の文章は、つぎのようになっているらしいからである。「女房なんぞ、くたばりやがれ。すばらしい女だよ。地獄ゆきと願いたい。」全盛期の教会といえども、自己におもしろくない証拠を、ああいうふうに扱わなかったろう。

ヴァイトブレヒト・ロートホルツ博士は、チャールズ・ストリクランドの熱烈な賛美者だから、彼を清浄潔白の人としてえがく危険はなかった。博士は一見、天真爛漫ともとれる行為にも、軽蔑すべき動機のひそむことを、狂いのない目で見破った。美術研究家であると同時

に、精神病理学者でもあったので、潜在意識も、ほとんど彼には隠しだてができなかった。いかなる神秘家でも、ありふれた事柄の中に、あれほど深い意味を見てとったものはない。神秘家の見るものといえば、口ではいえない神聖なものであるが、精神病理学者の見るのは、いいがたくけがらわしいものである。この博識な著者が、主人公の名声をきずつけるような事柄を、丹念にあばき立ててゆく情熱には、あやしい魅力をさえ感じるのである。何か残忍さ、あるいは卑劣さの例が引き出せるたびに、主人公にほれぼれとなるがごとくであり、世に忘れられていた話を持ち出し、ロバート・ストリクランド師の孝心をたたきのめすときには、異教徒を火刑するときの宗教裁判官のように、狂喜するのであった。彼の営々たる努力は、おどろくべきものがあった。どんなにささやかなことでも、彼の目をのがれるものはなく、チャールズ・ストリクランドが、洗濯屋の勘定書をはらわないでおいたとすれば、まさにそれは、くだくだ(インエキスジャン)と述べられるだろうし、また、半クラウンの借金でも、はらわないでおいたとすれば、その駆引きの一部始終は、もらすところなく告げられるのだ。

二

チャールズ・ストリクランドに関しては、もはやこれだけたくさんのことが書かれているのだから、私がそれ以上書く必要はないように思われる。画家の記念碑は、その作品である。たいていの人よりは、私のほうが彼をよく知っていることは事実だ。彼にはじめて会ったのは、彼が画家になるはるか前のことで、パリでの苦難時代にも、たびたび会っていたのである。しかし、大戦という偶然によって、私がタヒチへゆくということがなかったならば、私は、回想を書きとめるようなことはしなかったであろう。よく知られているように、あの島で彼はその晩年を送ったのだが、そこで私は、彼と親しかった人々を知ることになった。私は彼の悲劇的な一生の中の、もっとも不明の個所として残っている部分に、光を投ずべき立場にあるわけなのである。ストリクランドの偉大さを信じている人々が正しいとするならば、生前の彼を知っていたものたちの個人的な思い出話も、あながちむだとはいえないだろう。ストリクランドを知る私と同じくらいに、エル・グレコを親しく知っていたというような人がいたとしたならば、その回想録を出させるために、われわれは何を惜しむだろうか?

しかし私は、そういう口実によって自分を正当化しようとしているのではない。だれだったか忘れたが、毎日、自己のきらいなことを二つずつ行なうのは、魂のためによいことだ、とすすめていた人があった。賢明な人

だった。そこで私は、この教えをきちょうめんに守っている。というのは、毎日、私は起き、そして床にはいらなければならないからである。ところが、私の性質には、一片の禁欲主義的な傾向があり、毎週、もっときびしい苦行を肉体に課しているのだ。「タイムズ」紙の週刊文芸付録を、必ず読んでいるのだ。いかにおびただしい数の本が書かれているか、著者たちが、出版された本を見て、どんなに明るい希望をいだくか、それらにどんな運命が待っているか、そういうことを考えるのは、有益な鍛練である。書物が大衆の中へはいってゆくという見込みが、どれだけあるのだろうか。それに、成功した本といっても、それはある一シーズンだけの成功である。行きずりの読者を、二、三時間のんびりさせるか、旅行の退屈をまぎらしてやるかのために、著者がどんなに苦心し、どんなつらい経験に耐え、どんな心労を味わったかは、神のみぞ知るである。書評から判断すれば、それらの書物の多くは、みごとに、入念に書かれたものである。書きあげるのに、ひじょうに頭をしぼっている。生涯の心血をそそいでの労力がなされているものさえある。そこから得られる教訓は、作家というものは、ただその仕事そのものと、心にわだかまるものから解放されるということにのみ、酬いを見いだすべきものであって、ほかのすべてのことに無関心で、賞賛も非難も、失敗も成功も、心にすべきではないということだ。

さて、大戦がやってきて、それとともに、新しい態度があらわれた。青年たちは、もっと古い時代のわれわれが知らなかった神に向かった。われわれの後からくる人たちがどの方向へ向かってゆくか、すでに見ることができる。力を自覚し、激動する若い世代は、ドアをノックしたりしない。ドアをけってとびこんできて、われわれの座席に腰をおろしてしまっている。彼らの叫喚は四辺にひびきわたる。彼らの先輩の中には、青年たちの狂態のまねをして、自分たちの時代はまだ終わっていないぞと、自分に納得させようとつとめるのもいる。彼らは、もっとも元気のいいものといっしょになって叫ぶのだが、その戦闘の叫び声は、その口辺にうつろにこだまする。脂粉をこらしてけばけばしくよそおい、どぎつい賑やかさを見せながら、青春の幻影を取りもどそうとつとめる浮気女さながらだ。もっと賢明な連中は、気品ゆたかにわが道をゆく。平静なその微笑は、若いものは勝手にさせておけと、小ばかにしている。思い出せば、自分たちもまた、ちょうどこれと同じように騒々しく、同じような侮蔑をこめて、満ちたりた世代を踏みにじってきたものだ。これらのはなばなしく先駆の炬火を持つものらも、たちまちその席をゆずりわたすようになることを、彼らは予見している。究極の権威などはないのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb